

民衆の宗教化

方　　哲　　源

從來のまゝの宗教では、今日のやうに複雑に進展してゆく所の一般民衆を如何にして宗教化するかは實に困難であると思ふ。宗教化とは信者をつくることではない。その宗教の精神が人々の心に働き、その智情意を聖化し、真理、道義に合つた言行をなし、個人、國家、世界に對して、正善の貢獻をなすに至る事である。かゝる信者をつくるのが眞の宗教化である。

我等は困難に遭遇した場合必ず神人合一の信仰心から出てくる神智明斷を以つてこれを解決し處理せねばならぬ。神佛は實に聖愛であると共に、絶大の全智全能純美の實在である。而してその働きも唯人の罪を救ふと云ふのみでなく人間を生老病死等の一切の苦や不幸から救つて下される慈悲の救ひである。そして救ひを受くる我々は、唯絶對なる神を信仰する處即ち斷疑生信の當處に救ひがある。これが所謂神佛の恩寵である。

神佛は教育者として斷わす我々を教へてくれる。イエスが「我は罪人を招かんとして來れり」と云ひ、「迷はざる九十九頭の羊よりも、迷へる一匹の羊を求む」と云つたのは「神の救ひの道」であり又

「天の父の完全なる如く、汝等も完全なるべし」と云つたのは「神の教育の道」である。救ひも教育も共に神の恩寵である。之即ち日蓮上人の行學二道であつてこの行學二道の成就是、神人合一の禮讚的榮光の姿である。

人間は神佛の實在と完全を要請し、信仰し、修行する事に依つて自己の人格を向上させ、亦他人をも教化向上させる事を得るのである。基督曰く「永遠の生命は、神を信ずると共に汝の業をなし遂げるに由つて、我は地上に汝の榮光をあらはせり」。

神佛は宇宙萬物を統一主宰し、國家の盛衰興亡、人間の榮枯生死を主宰する所の最高の慈悲者である。古人が「死生有命富貴在天」と云ひ、「事を謀るは人にあり、事を成すは天にあり」と云ひ、「人事を盡して天命を待つ」と云ふたのはそれである。この神や佛を尊崇し、この神や佛の宇宙主宰の大精神を學び、以てそれを國家の經營、町村の經營、學校の經營、工場の經營、農村の經營等にうつし、これが成功の曉は榮を神や佛に歸し感謝して自ら誇らず、失敗するも望みを失はず自己の無智不徳無才無力を反省して、修行し向上することこそ、善き精神であり亦之によつて萬事を成すことが出来る。基督は「我父は今に至る迄働き玉ふ、我も亦働くなり」又曰く「我は眞の葡萄の樹、我が父は農父なり」と云ひ、パウロは「神と共に働く」と云ふたやうに、かゝる神人合一の心を以て神や佛の如く振舞ふ。これが眞の信仰、眞の修行、眞の傳道、眞の勞働である。名譽の爲に働かず、利益の爲に

働かず、神や佛の心を學び、神や佛の働きに倣ひ、人格、事業、國家、世界の完成の爲に働き、神佛の天地完成の大事業に參與して働く。こゝに日蓮上人の所謂婆婆即寂光觀の精神の理想が實現される。この精神を以て治者、被治者、教育者、傳道者、信者、未信者、經營者、資本家、勞働者一切を教養することによつて、初めてよく民衆を宗教化し得る事が出來ると信するのである。その完全なる信仰と活動とによつて國家も世界も漸次にこれを宗教化し、現實社會を淨化し、そしてこの地上に理想郷たる佛國土を建設しなければならぬ。即ち日蓮上人の大難小難流罪死罪を忍受せられたのも亦身延山九ヶ年の悲惨な御生活も、以上に述べて來た理想を實現せんが爲であつた。然るにこの大理想を承け繼ぐ吾等日蓮門下にして、今日その精神を全うすべき人が果して幾人あるだらうか、聖人世を去ること最早六百幾十餘年、聖人の精神が文々句々に刻み込まれた所の法華經の眞理の顯揚に最大努力をなすべきにも係はらず徒らに法要葬式の道具にのみ用ひられてゐる事は遺憾千萬である。故に我々はこの時に當り、自己の爲、國家の爲、社會の爲に日蓮門下として大いに反省し、法華經の理想を實現すべく共同戰線に立たねばならぬ。

